フォト歌集

ひかりのキャンバス

ほんのりと
顔を赤らめ
隠れてる
小梅青梅
そのみずみずしさよ

少年の
手と口染めた
桑の実の
道あり行けば
赤の絨毯

姨捨(おばすて)の
棚田をのぼる
子どもらの
さえずり
風が二千にわたらす

麦畑(むぎはた)の
畔(あぜ)を払えば
こんがりと
焼き上がりおり
厚切りトースト

軽井沢の
志な乃と
名のつくそば処
味わうさらしな
舌と耳とで

そうとしか
思えぬ
連れ犬眺めてる
あんずの花を
歩いては止まる

雨なかの
ひたすらの立ち
撮りたくて
開ければ
手ぶらで
飛び立つさぎは

きのうから
一滴ずつを
預かって
田面（たおもて）移ろう
ひかりのキャンバス

土と水
まぜ合わせれば
クリームを
のせたポタージュ
滋養のスープ

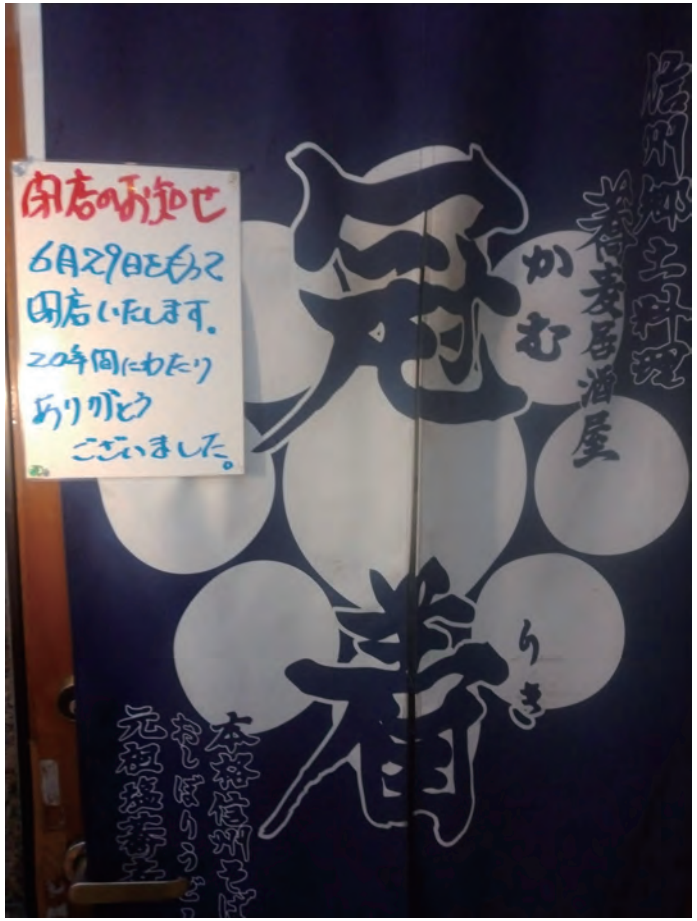
朝の日の燃えるを両の目見ひらいて見つめ続けて動かぬだるま

それぞれの
葉ばに
飛翔のつばさあり
川風吹けば
始まる羽ばたき

お日さまの通る道空け上るのを
みんなで待つ雲きのう大雨

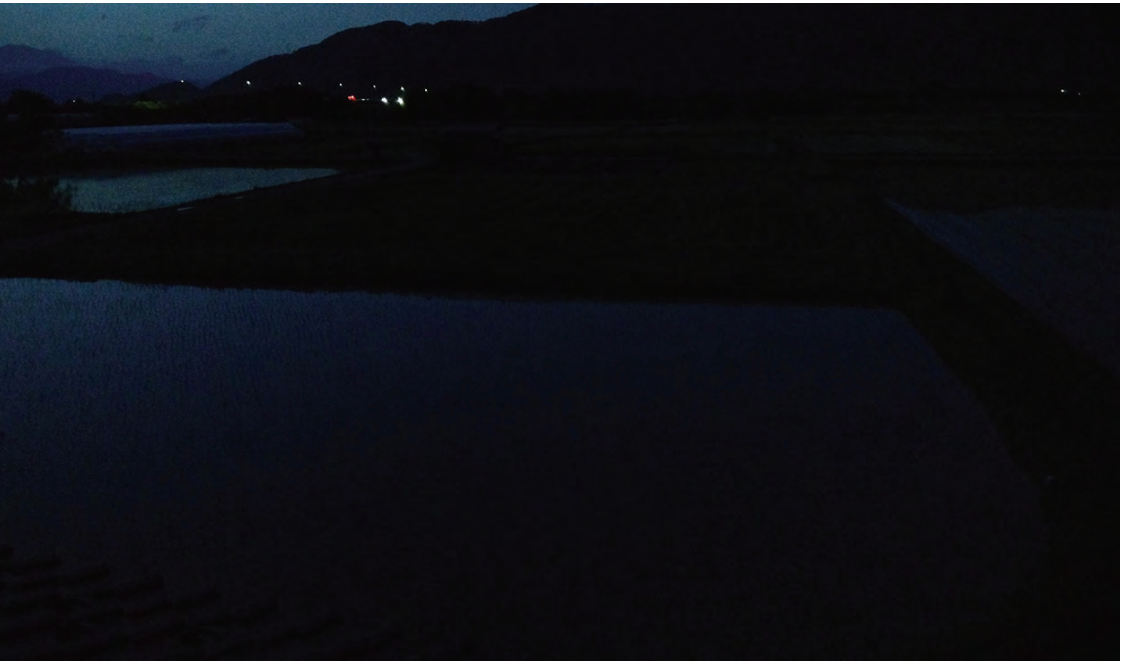
月が出る
峯に生まれる
雲たちよ
月都（げっと）の産を
あまねく誇れ

山手線（やまのてせん）
大塚駅より
ふるさとの
山を眺めて
勤めし日々よ



野の道を
通学路にして
ゆく少女
そよぐ麦の穂
整うきょうが

耳元の
真夜(まよ)のかえるの
子守歌
早苗(さなえ)よく寝る
よくそだちゆく



たくさんの
夜を見てきた
野良(のら)だから
そろそろかもと
月の出を待つ

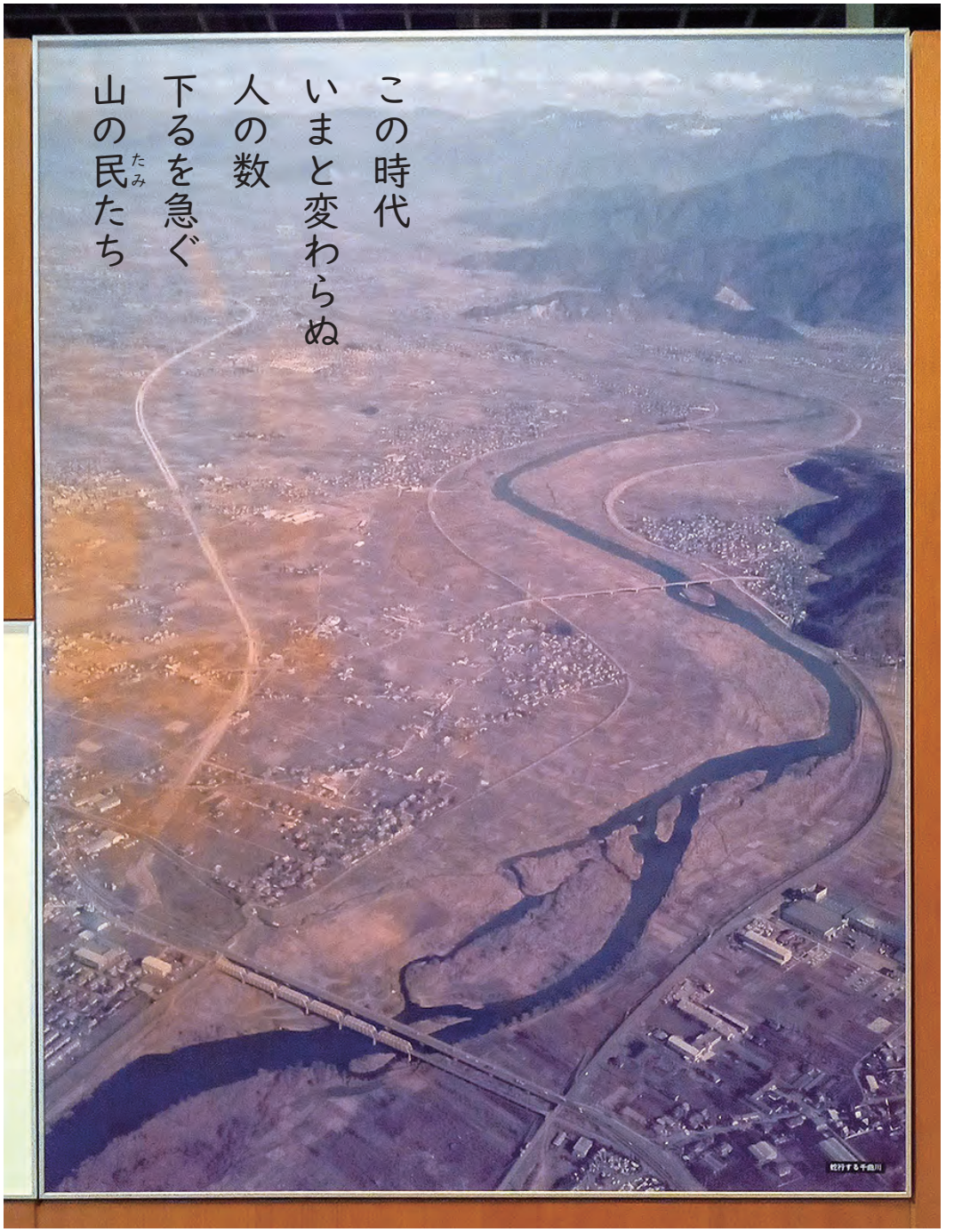
万物(ばんぶつ)を
生かす聖水
わきだして
尽きることなく
嗚呼(ああ)お種池(たねいけ)

便利さの
極みを享受
するわれと
おなじ月見し
平安人は

水たまり
あれば冠着（かむりき）
磨かれた
自分の姿
うつしておりぬ

少年の
大人に変わる
声たちを
風が運んで
木草がゆれる

おいしそう
ゆでた青菜に
たっぷりの
たまごソースの
春のテリーヌ



この時代
いまと変わらぬ
人の数
下るを急ぐ
山の民(たみ)たち

あの山の
てっぺんに神
いなさると
言いし媼(おうな)は
仏(ほとけ)となりぬ

羽ばたきの
大きさ耳を
澄ませれば
小さきものは
光りの玉よ

野の草の
さえずり楽し
ヒト科との共演
その名は
ＣＢＢ

砂利の土手
走りし自転車
あさタに
陽水(ようすい)アリス
唱えるこえも

白壁とみどりの亀のあかりとり
ああモダニズム姨捨(おばすて)駅の

白き身に赤き頭のせ亀飾る
姨捨駅の千年万歳

さらしなの月の光りのあまねしは
姨捨駅のその白よりか

千年の
大時空間
そのなかの
ひとこまとなり
浸るすがしさ

はじまりの
冠着(かむりき)の石
うづもれて
果樹の根が知る
仙石(せんごく)の里

月の道
吹き清めたい
北風に
合い間もいいと
雲はゆずらず

良い香り
とっても甘い
蜜あれば
出口はあとに
考えること

一度でも
顔に見えれば
連れてけと
新たな世界を
求める子石

冠着（かむりき）と
わが店の月
向き合えば
なんと多くの
人の行きかい

あまりにも陽気よければ掘り上がり
もぐらは爪を隠すを忘る

葦(あし)たちは
老いて立ちおり
足もとに
新緑そろそろ
代わる時くる

見るたびに
唾液（だえき）の泉
あるを知り
しばらく湧かせ
ごくんとひと口

同じ花
見てもそれぞれ
ちがう花
母のあんずの瓶は
少なし

野良でさえ
立ち止まらざるを
えぬ月を
野良写そうとして
知る不覚

今世紀
はじめの二年
住んだこと
浄土の上方
嗚呼往生寺（ああおうじょうじ）

ばあちゃんと
父ちゃんの名の
牛を見て
城山小に
通ったわが娘

膝折れば
角にも槍にも
目玉にも
見えて楽しい
春の小草は

避けられぬ
地震と地すべり
あるという
きょう限りかも
この景観は

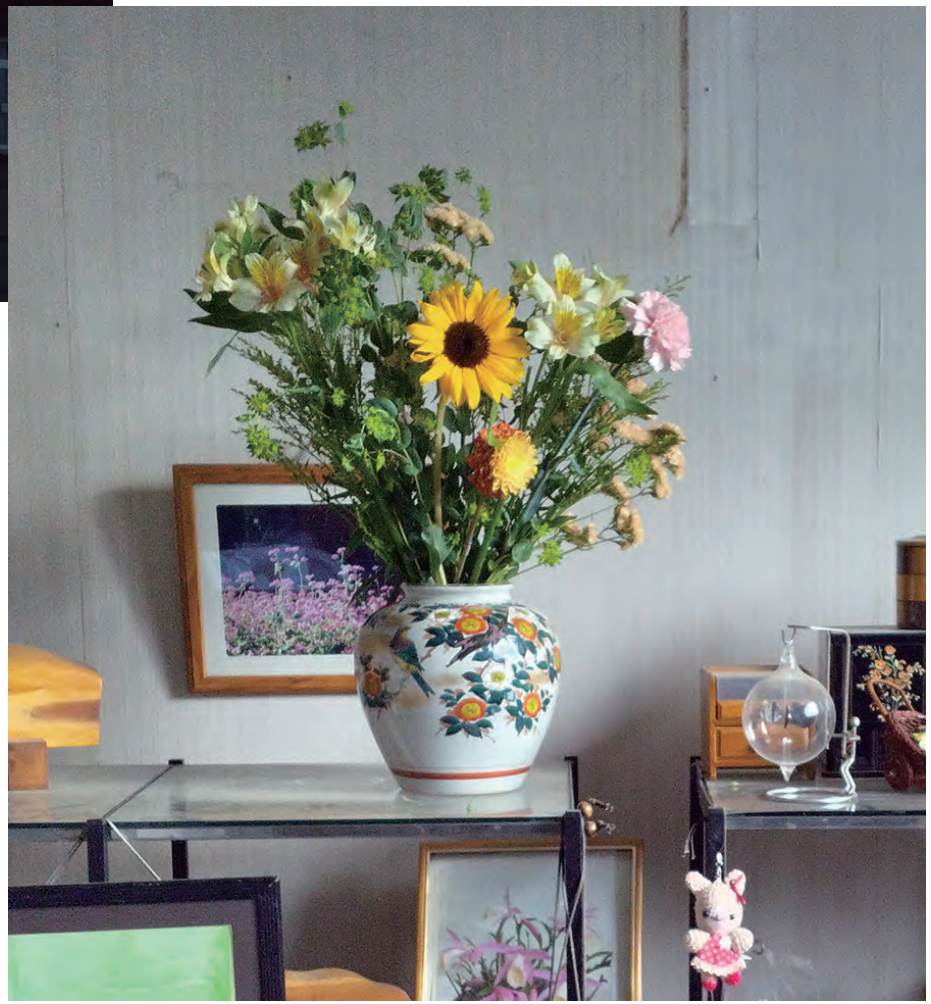
冠着(かむりき)は
燃えているのだ
全身と
全霊かけて
さらしなに立つ

それぞれの
峯に名前が
もしあれば
月の出場所は
速報の価値

流域の
治水まかさる
ぶどう畑(はた)
「血の管(くだ)われにあり」と
春待つ

フライにし
たまごでとじた
どんぶりの
食材なりし
末裔(まつえい)いまも

真ん中を
になう一輪
さだまれば
まわりは肩の
ちからを抜いて



月よ待て
沈むなとどまれ
真向いの
そなたを照らす
ものがまもなく

にらみ合い
うなり居座り
わき見して
武力行使は
せぬまま去れり

お日さまが
そろそろ出ると
雲たちは
声を掛け合い
スペースつくる

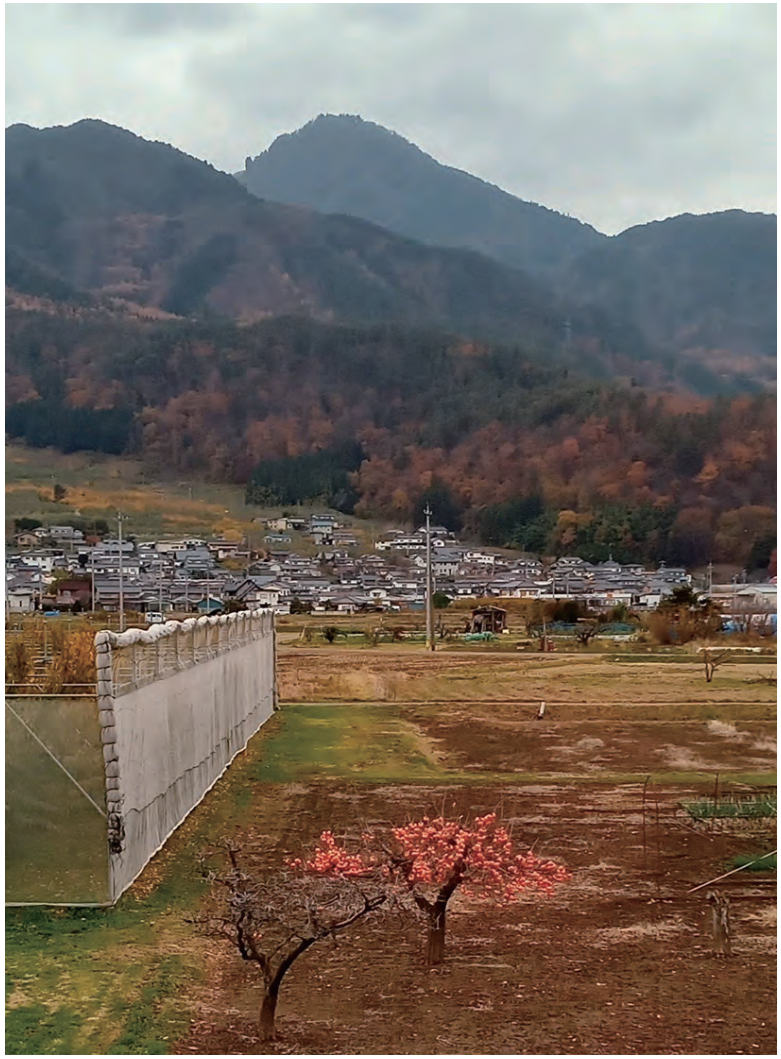
旅立ちの
乗りもの着けり
わが里に
光りと風を
推進力に

豊穣と
スリムなからだの
両方を
求めなさいと
お手本示す

ついに来た
われらのウルトラ
わが里に
月の都は
彼方(かなた)の話題

納屋(なや)に寄り
過ごそうきょうは
天と地を
つなぐ極太
雨の御柱(みはしら)

熟柿は
ひたすら落ちず
とどまりて
冠着(かむりき)入れて
撮れといざなう



さけ咥(くわ)う
熊も老いたり
透ける肌
円(まる)きまなこの
古りし置き物

あの白が
山をのぼって
行きはじめ
春本番と
指さし母は

鳥ねこの
耕しに雨
たまりいて
晴れればお日さま
それぞれにいる

み光りを
まとい豆たち
熟すなり
叩かるる待つ
ただひたすらに

求めるは
魚か砂利か
それだけの
違い晩秋
千曲（ちくま）の川原

鏡台(きょうだい)を
上るはわれも
月だけじゃないと
燃えてる
太陽のあさ

さらしなの里とは
いかに
春くれば
超大型の
巨人が来たり

わがまなこ
圧倒的に
優れてる
五倍はでかい
いやもっとでかい

山の神かむりきという名でありて入口にある冠着大学
山の神まつる社（やしろ）の屋根きずは大学生の鎌研（かまと）ぎの跡
たくさんの学生育てし冠着の御山（みやま）の神は逝（い）きたりついに

日が差せば
ぬくもり好きの
猫がきて
切り株の身と
一心同体

こちらから
いつも手を振る
笑み投げる
かなわなくても
目線があえば

冠着の
十三仏(じゅうさんぶつ)は
鎮座され
山ごと魂
めざめる春よ

このフォントえもいわれぬと思うのは
わが身に巣食うさらしなの神

猫バスは
ここにいたのか
ねずみとの
相性じつは
いいこと見せる

大空を
白き魚(うお)ゆく
お日がらの
よければ川面(かわも)を
跳ねたるままに

あかつきの山嶺（さんれい）に出（い）づ新月は鬼の角かと見まがう切れ味

差す光り
あるいは上りゆく光り
天と地てらし
ひしめくひかり

意図のなき
三字の並び
わが前に
出現させり
地上の月夜

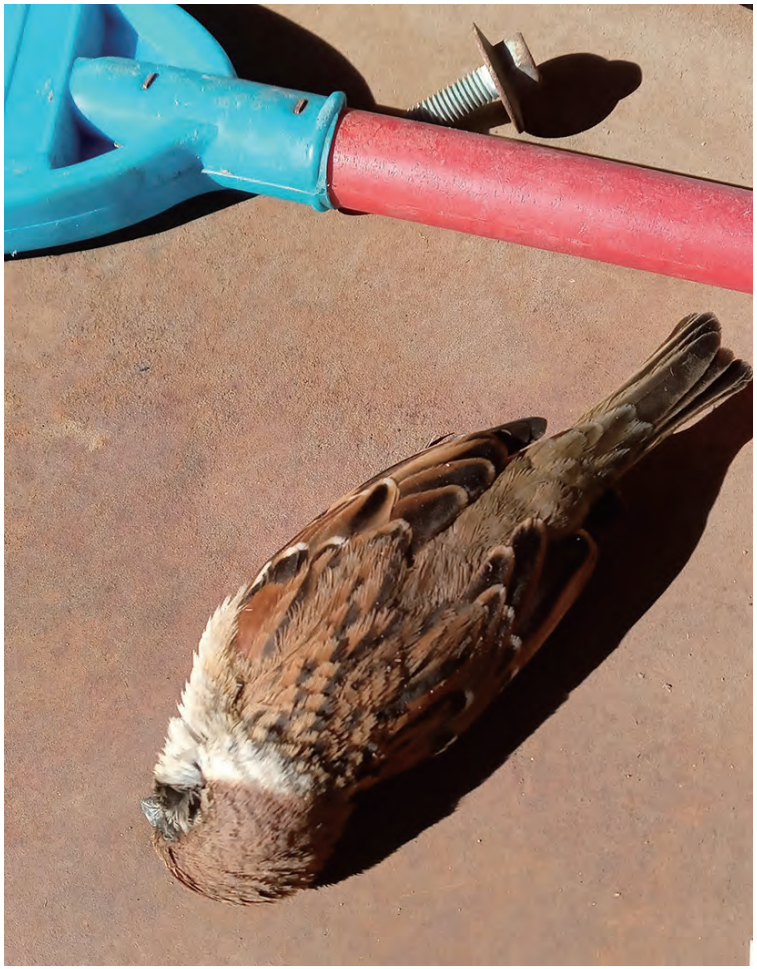
いつまでも
聴いていたいぞ
歌声を
去るなとんびよ
ああもう見えぬ

いち年の
収穫祝う
色いろの
餅たちおはぎ
さくらにきな粉

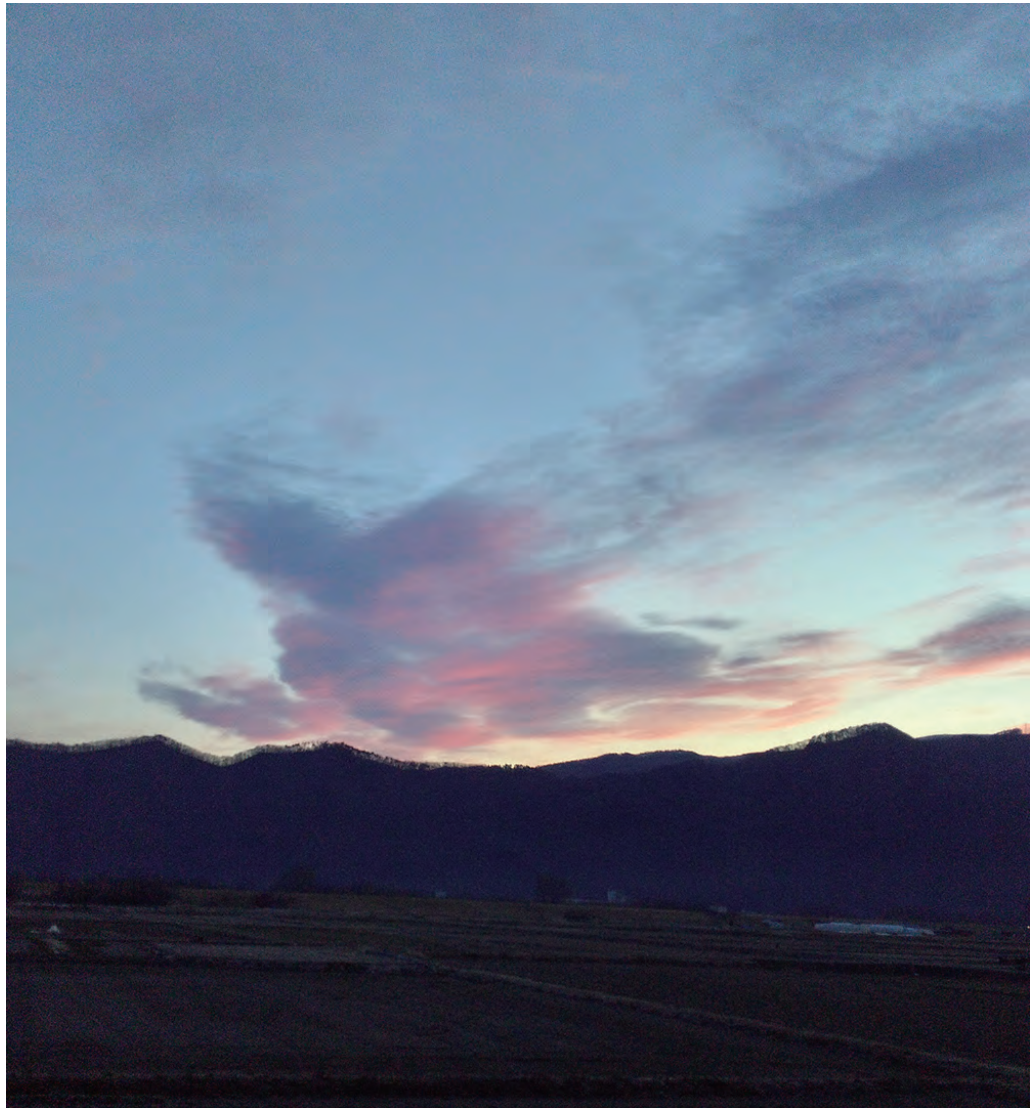
折りとられ
割かれ削がれて
更科は
初めの信濃の
証人として

長野県宝「国府木簡」。「符更科郡司等可致」と墨書。長野県立歴史館所蔵

ゆえあって
伐られた大木
どのくらい
命の砦（とりで）と
なってきたのか



わが店に
小鳥よくきて
見送るに
窓辺に落ちて
動かぬ小鳥



山越しの
巨神鉄人28号を
見つけて
始まるひと日

魅力ある
獲物あるらし
雪下の
ジャンプのあとの
春待つきつね

26は
鳥の羽ばたき
旅立ちの
仕方がないか
一日一本

降りぶりを
恐るる世なり
巨人さえ
踵(きびす)をかえす
千曲(ちくま)の堤(つつみ)

切り口は
窓外にあり
茶とともに
たしなむ
虎屋の新更科を

寒夜ゆえ
とどまれず降る
星ありて
輝きたらぬと
光れり朝も

大崩壊三十万年前にあり
二(に)みね従う三峯山(みつみねさん)は

原始なる三峯山の大崩壊
棚田の土は幻のみね

ぬくもりは
ひかりであるか
父と娘(こ)の
つなぐ手にあり
あすへの落日

キョエちゃんか
カラスか迷う
冬枯れの
岸辺にぎやか
まあよくにてる

泥水を
かぶる石たち
ひあがれば
白玉として
それぞれにあり

新しき
道は畑の
土のけて
砂利土砂入れて
いかにも固し

二十年
待てれば朽ちず
人気ある
物件なりし
かむりきの里

甘からく
しょうゆをとけば
待つのみの
粘り気のある
はかなき破裂

子ら上げて
ふるまいくれし
おばさんは
娘(こ)のすむ都へ
笑顔でゆけり

あとがき

家の裏手には田畑が一面に広がり、千曲川（ちくまがわ）が流れています。区画をまとめ水路を整備する構造改善が行われたものの、その広大な野の景色は、物心ついたころから変わりません。少年時代はこの田畑と千曲川の堤防、川原が遊び場でした。村の中でいちばんここで遊んだと自負しています。

定年退職を機に雑貨店だった家を改装、前職を生かし、作文支援業を始めました。生地は平安時代の日記文学「更級（さらしな）日記」のタイトルになった「さらしなの里」。日記作者のように伝えたい思いがある方の文章表現をお手伝いするのにふさわしい場所だと考えました。仕事が一段落すると、田畑から堤防に上がり、川原におります。野の景色の中にいて、いいなあと思った風景をスマホで写真に撮り、なぜいいなと思ったのか、その景色の魅力を多くの人に伝えたいと作った短歌が、本書の多くを占めています。

家の正面には、さらしなの里のシンボル冠着山（かむりきやま）（姨捨山（おばすてやま））がそびえています。この山とセットで写真に切り取ると面白い景色がたくさんあり、それも詠んでいます。ほかにも、目の前の景色が面白くて写真に収め、あとから歌を付けたものがあります。写真と短歌をセットにすることで、伝えたい思いが伝わりやすく、より豊かに想像を膨らませられるのではと思います。

本書は、退職前に作った歌集「さらしなのうた」の続編です。前作は短歌だけを収載しています。

大谷善邦

大谷善邦（おおたに・よしくに）

夢の作文支援センター さらしな堂代表。信州さらしなの里（長野県千曲市若宮、旧更級郡更級村）に生まれる。進学のため上京。共同通信社に就職。2021年定年退社。文化部の記者として「高齢社会問題」を担当したとき、郷里の冠着山が姨捨山の異名を持つ理由に関心を持ち、さらしな・姨捨の歴史文化の掘り起こしを始めた。定年後は新聞記者の経験を生かし、伝えたい思いを自分の言葉で綴るのをお手伝いする作文支援業を営む。「月の都」として日本遺産になった千曲市の魅力を発信する住民団体「さらしなルネサンス」会長。著書に「地名遺産さらしな」「白　さらしな発日本美意識考」「歌集さらしなのうた」など。制作をお手伝いした絵本に「たぬ平とハクビシン」（中村玲子著）「チュンのあさごはん」（同）、「あんず姫ものがたり」（石坂まち子著）など。2020年、短歌結社「コスモス短歌会」に入会。

フォト歌集　ひかりのキャンバス　さらしなのうたⅡ

発行　2023年8月13日

著　者　大　谷　善　邦

制　作　夢の作文支援センター　さらしな堂

〒389-0813　長野県千曲市若宮1184-6

（旧更級郡更級村）